

風姿花伝第一、 年来稽古条々 七歳

此芸に於て、大方七歳を以て初とす。この比の能の稽古、必ずその物自然と為出す事に、得たる風体あるべし。舞働きの間、音曲、若は怒れる事なんどにてもあれ、風度為出さん懸かり

〔口訳〕

此の芸に於ては、大体七歳を以て稽古の初とする。この七歳頃の能の稽古では、其の子供が、ひとりやり出したことの中に、きつと、どこかに得意な良い所があるものである。それが、舞や働きの中に、或は音曲の中に、或は鬼能の如き怒れる風体の中にといふ風に、どこにあつても良いから、自然に子供がやり出す風情ある芸を先づそのままに放任して、子供の思ひのままにやらせるが良い。それを、善いだの悪いだのと、さう手を入れて教へるのはいけない。あまりひどく教訓すると、

を、先打任せて、心の儘に  
為さすべし。さのみに、善  
き悪しきとは、教うべから  
ず。余りに太く諫むれば、  
童は、氣を失いて、能も  
懶く成りたちぬれば、即  
て能は止まる也。唯、音曲

子供は折角の意氣も沮喪して、能の興  
味を失ひ、いや氣がさしてしまふと、  
そのまま能の進歩は止つてしまふもの  
だ。ただ心すべき事は、子供には音曲  
か舞か働きかでなくては、やらせては  
いけない。相当手のこんだ物真似など  
は、たとひその子供が出来るにしても、  
教へてはいけない。又、出演に際しても、  
晴れの舞台の脇能などを演じさせては  
いけない。三番目か四番目の、丁度適  
当と思はれるやうな時機に、その子供  
の得意な芸を演じさせるが良い。

働き舞なんとならでは、為  
さすべからず。さのみの物  
真似は、仮令為べくとも、  
教ふまじきなり。大場なん  
どの脇の申樂には、立つべ  
からず。三番四番の時分の、  
宜からんずるに、得たらん

風体を為<sup>せ</sup>さすべし。

---

〔評〕

最初の間は当人の得意な所を、気のむくままにやらせて置く、といふ教へ方は面白い。そこに子供相当の興味と元気が生れ、従つて進歩もあるわけである。これに教訓をひどく加へると、嫌気がさし、嫌気がさせば、進歩が止まるといふのも、子供の心理をよく見ぬいてゐる。物真似を教へないのは、先づ、舞歌幽玄の素地を、子供時代に固める必要があるためで、至花道書の二曲三体の条を参照すべきであらう。又大場の

協能に出しては良くないといふも、協能の性質が、子供の演能に適しないためであると思はれる。